

少子化

2021. 10. 20

「少子化」という言葉は、もうすっかり当たり前のことになっており、自明の理とも言える。少子化に伴う問題が多々あることは事実であり、日本の未来を考えるときに、今よりも理解を進めておく必要があると思うに至った。

日本の人口は、2008年に1億2808万4000人でピークを迎えた。それ以降、確実に人口減少を続けている。福島県でも、ここ数年間で、いくつの小学校や中学校がなくなってしまったのだろうか。どんどん統廃合が続いている。この動きは高等学校にも波及し、統合して新しい高校が誕生している。

私が教頭としてお世話になった中学校は、もはやない。校長を務めた小学校も、あと数年でなくなってしまうかもしれない。同じく校長として創立百周年を迎えた高校も、令和4年度でなくなってしまう。私が行く学校はなくなってしまう運命にあるのか。いや、さすがに野田中学校は、これからも輝き続けるだろう。

1人の女性が一生のうちに産む子どもの数を合計特殊出生率と呼ぶ。日本の出生率は、第1次ベビーブーム期には4を超えていた。現在は、1.36（2019年）である。一時、1.26（2005年）まで落ち込んだことを思えば、少し回復したものの、人口維持に必要とされる出生率の2.07には全く及ばない。

こうなることは、第2次ベビーブーム（1971年～74年）が終わる頃には予測できていた。にもかかわらず、少子化が戦後初めて問題になったのは1990年である。その前年の出生率が、1.57だったことが発表されてからだった。

少子化とは、人口が少なくなるばかりでなく、15～64歳の生産年齢人口が減り、65歳以上の高齢化率が上がることを意味する。ある推計によると、2065年の日本の高齢化率は38.4%で、実に国民2.6人に1人が65歳以上という超高齢化社会が到来する。

我が家で考えてみる。2065年というと、人生100年と言われても、きっと私は生きてはいないだろう。家人も、たぶん生きてはいない。長男はというと68歳、長女が64歳となる。二人とも高齢化に属するグループである。すると、問題は孫となる。果たして、孫たちにとって、日本は、どんな社会になっているのかということである。今、本気で少子化対策について考えることは、孫の代まで関わる重要なことなのだと認識する必要がある。

どんどん、自分の思考が“おじいちゃん”になっていく。世の中のことを考えるということは、今を考えるだけではなく、将来を、そして未来を考えることなのだろう。せめて孫の代のことまで考えるのが、我々世代の宿題、いや使命なのだと思う。

学校の教員は、身をもって少子化を切実なものとして考えることができるポジションにいる。他人事ではなく、少しでも自分事して考えていきたい。